

トランスローカリティ・モデル—地方の「新しい働き方」を考える

同志社大学社会学部社会学科

轡田 竜蔵

1. 報告の趣旨

筆者は、2014年、広島都市圏に位置する安芸郡府中町と、そこから車で1時間半の中山間地にある三次市の二か所において、20~30代を対象にした質問紙調査を行い、その後100人近くに対し、個別インタビュー調査を実施してきた(轡田 2017)。本報告は、この調査データのなかから、特に都会での仕事を辞めて、給料や生活条件としては前職と比べて必ずしも条件の良くない地域に「あえて」移動した者(Uターン、または他地域からの転入者)の複数の事例を中心に考察する。そして、本報告では、これを「トランスローカリティ」という解釈枠組みから考察し、具体的に検証する。このモデルは、「地元」や「地域」への「愛着」、あるいはそこへの居住意思の強弱を問題とする「定住モデル」と対置される。

2. トランスローカリティ・モデル

「あえて」地方を志向する若者は、「大都市」や「海外」生活のリスクを回避しているという意味で、「内向き」というフレームで解釈されることが多い。ところが、筆者の調査データによると、こうした解釈は極端であり、地方暮らしの若者にとってのライフコース上の移動経験、あるいは日常的な移動の活発さを過小評価した見方であると考えられる。

「地方暮らし」の若者の多数は、Uターンまたは他地域からの転入者であり、「ずっと地元」である者は少数派である。そして、その傾向は拠点都市よりも、条件不利地域において顕著である。Uターン層や転入層は、地元外生活の経験が無い者より、生活や人生についての現状評価が比較的高い。そして、それは、そのトランスローカルなモビリティの高さのためである。地方暮らしの若者の多くにとって、居住地域のコミュニティとの関わりは限定的であり、そのパーソナル・ネットワークは広範囲に及ぶ。居住地域を超えた「ネットワーク資本」(ジョン・アーリ)が生活や人生に対する現状評価に関係していると言える。

3. 地方における「新しい働き方」志向をどう評価するか

近年、地方にUターンもしくは転入し、自営業や協セクター等で地域志向の仕事に就く者たちの「新しい働き方」に注目が集まっている。だが、こうした現象については、その多くが生計の確保や不透明なキャリアの見通しに不安を抱えているという現実も踏まえ、個々の生き方の選択肢の幅(アマルティア・センの言う「capability: 潜在能力」)という観点から多角的に評価する必要がある。調査データから示唆されることは、居住地域への満足度、定住意識や愛着の高さはあまり問題ではなく、複数の地域にまたがる個々人の生活や人生のあり方に注目し、そこに空間的な制約がどのように働いているかに着目するトランスローカリティ・モデルの観点が有効ということである。

(参考文献) 轡田竜蔵(2017)『地方暮らしの幸福と若者』勁草書房